

「三陸海産再生プロジェクト」 夢と希望の水産業

ver3

2011年9月11日(日) 12:30 ~ 14:15
にんげんクラブ全国大会 講演会使用原稿
atパシフィコ横浜 大ホール

一般社団法人 三陸海産再生プロジェクト 代表理事
(株式会社 木の屋石巻水産 副社長)
木村 隆之



❖ もくじ

これは何の缶詰？

2011年3月11月14時46分

仲間たちと越えた死線

帰らぬ仲間への誓い

「奇跡の缶詰」への軌跡

プロジェクト発進！

本当に大切なもの、価値のあるものは何か？

争い続ける社会から、助け合う社会へ

幸せの体質

輝く未来の日本へ向かって

47 41 38 33 31 25 22 15 4 1

これは何の缶詰？

皆さん、こんにちは。

私は、宮城県石巻市に本社があります水産加工メーカー「木の屋石巻水産」の副社長を務めております木村隆之と申します。

突然ですが皆さん、この缶詰は何の缶詰かわかりでしょうか？
ラベルも何もありません。現在弊社では、この名もない缶詰を社員一丸となつて日本中の皆様にお届けしております。

おそらくこの缶の中身は「金華そば」だと思つのですが、それが「みそ煮」なのか「醤油味」なのか「水煮」なのか、じつは、私も何が入っているのかわかりません。

ですが、どの缶詰にも主原料として「希望」がたくさん詰まっています。これは間違いありません。それに、全国の皆さんや、弊社スタッフ私どもの「思い」「絆」がたっぷり含まれています。

にんげんクラブ泉浩樹提供



あとで詳しくご紹介させていただきますが、レベルのないこの缶詰は、「奇跡の缶詰」と呼ばれ、全国の方々にお求めいただいております。

もともと弊社は、1957年の創業より、鯨肉の加工を主力商品としていて、「鯨大和煮缶詰」や「鯨ベーコン」「竜田揚げ」がご好評をいただいております。近年は、金華山沖で獲れる鯖をつかった「金華さば」の缶詰も人気商品となっております。

世界有数の漁場として知られる三陸海岸ですが、金華さばの獲れる金華山沖は、黒潮と親潮が混ざり合う、もともと良質な漁場といわれています。そのため、金華山沖で獲れる鯖は大型で脂のノリも大変よいのが特徴です。

金華山沖には、標高444・9メートルで面積は10・28K平方メートルの小さな山というか、島が浮かんでいます。そして、この島の頂上には「黄金山神社」が鎮座しているのですが、じつは、この島全体が黄金山神社の御神域となっていて、恐山、出羽三山と並ぶ奥州三大霊場に数えられています。

古くから、この島に「三年続けてお参りすれば一生お金に困ることはない」といわれていて、たくさんのお参り客の方が訪れてきました。最近では、パワースポットとして注目

をあび、全国津々浦々、いろいろな世代の参拝客の方が足を運んでみえます。

このように、あらゆる意味でも恵まれた環境にある私ども「木の屋石巻水産」では、その恵みをそのままお客様にお届けするべく、保存料・添加物を一切使用せず、厳選された自然素材のみを使用し、獲れたての金華さばを、従業員ひとりひとりが細心のチェックを払い、また、愛情を込めて、1缶1缶手詰めで製造しております。

一般に流通している缶詰と比較したら、けっして安い値段ではないのですが、こうした私どもの思いや努力が通じてか、現在は、主力の鯨肉商品と並ぶ人気商品として好評をいただいております。

いえ、正確に言えば、「...」いただいております。

と、申しますのも、今年3月11日の震災によって、弊社は、工場も倉庫もすべて津波に飲みこまれてしまったからです。

私どもの会社だけではありません。水産加工場がいくつも立ち並ぶ「水産加工団地」一帯が津波で壊滅的な被害を受け、「瓦礫の山と化してしまいました。

現在は、主だった瓦礫が撤去されてはいるものの、それらを集積した場所がいくつもあり、いっどこでどう処理するとも知れないままに放置されています。

「戦後の焼け野原みたいだ」と、この惨状を目の当たりにした人は同じようなことを口にします。

この缶詰は、そうした状況下にさらされていた缶詰です。

この度の東日本大震災では、死者行方不明者が約2万人、そのうちの半数以上が宮城県の人たちです。そして、石巻市だけでその半数近い4000人以上もの人が犠牲になってしまいました。

助かった人たちでも、津波で家がまるごと流されてしまったり、住めない状況になってしまったりして、今なお避難所で生活をしている人たちが大勢います。

わが家も津波被害で半壊し、現在は市内で間借りをして暮らしています。

ここで少し、震災当日の様子をお話したいと思います。

2011年3月11日14時46分

ここ数年、震度1から2程度の小規模の地震が頻繁に起きていました。おそらくこれに

より、エネルギーがうまく具合に分散されているのだろうと、つまり、さほど大きな地震はこないだろうと、私自身はむしろ安心していました。

ですが、今年に入ってから、1月2月にほとんど地震がきていません。すこし嫌な予感がしていました。

そんなとき、震度5のけっこう大きな地震がありました。震災の数日前のことです。

「工場は大丈夫?」「被害はなかった?」と、いろいろな方々から連絡をいただき、「大丈夫だったよ」と、元気に応えていました。

というのも、「最近地震がこなかったのは、このためだったんだな。これで地震エネルギーが放出されたんだな」と、やっと安心できたからです。

しかし、それは最悪のシナリオの序章だったのです。

その日私は、打ち合わせの準備等があり、自宅にいました。それはいつもと変わらない日常の1コマでした。

そこに、14時46分、これまでに経験したことのない大きな揺れが突如として襲ってきたのです。

最近では、中国やニュージーランドなど、大きな地震が報じられていましたが、まさか

そのような事態に自分自身が遭遇するとは、とても信じられないし、意味がわかりませんでした。

「え、この災いがオレにくるの？ オレは運がいいヤツだぜ」

とっさにそう思いました。ですが現実には、まさに最悪の事態に直面していたのです。

これまでに体験したことのない尋常ではない揺れ方で、時間もかなり長く、東北大学の調査によれば、JR仙台駅前のビルに設置した地震計のデータから、揺れていた時間はなんと3分にも渡っていたようです。

その間、揺れが一時おさまりかけたように思える数秒間がありました。

おそらく、私のみならず誰もが、「止まれ、止まれ、これで揺れが止まれ」と、心の中で祈り叫んだことだと思います。しかし、何とということでしょう、いきおい今度は、ガガガーンと1メートルくらい床が抜けおちてしまったのです。地盤沈下でした。

そして無情にも、ゴゴゴゴーンという轟音とともに、またそこから激しい揺れが始まったのです。

もうダメだと、「これで死ぬんだな」と、命の火がもうじき消えてしまうことを、恐怖のうちで覚悟するしかありませんでした。

まさか自分の最期が、このようなカタチで終わるとは……。どんなに「死にたくない！」と思っても、なす術もなく、それももう目の前まで差し迫った現実だったのです。

しかし、揺れはやがておさまりました。

「助かったんだ！」と思った途端、凍りついていた体中の血液が、一気に全身に流れ始めた気がしました。家の中は散乱していましたが、とにかくひとまず安堵しました。

その後すぐに、社員寮になっている裏のアパートは大丈夫だろうかと思い、外に確認に出たところ、向かいの家の人が、崩れた薪を積み直している姿がありました。

まだ、寒い時期でしたから、薪ストーブを使っている人たちは、家の前に薪を積んでいたのです。

「あれ、そんな呑気なことをしていいの？」などと思いがりました。

アパートも家屋も、外側から確認したかぎりでは、何ら損傷は見られず、他のお宅の家屋もさほど被害を受けている様子ではなかったのですが、ただ、家の前の道路が大きく陥没していました。やはりあれだけの揺れだったのですから、このようなところは他にもあるのだろうと思いました。

それにしても、震源はどこなのか、他の地域はどうなっているのか、震度はいくつだった

たのか、まったく情報がわからなかったため、家内が「とにかくラジオをかけよう」と言
って、ラジオを引っ張り出してきました。

それと同時進行で、周囲の人たちの動きを見ていたら、道路事情を知らないで走ってき
たクルマが、先ほどの陥没した部分にガツンとぶつかっている光景がありました。

「わ、なんだなんだ、気を付けないと危ないわこれ」と思いつつ、さらにラジオに耳を傾
けていると、工場からスタッフがひとりアパートに戻ってくるのが見えました。

「どうだった工場？」

彼のもとに駆けつけて聞きました。

「いやもうダメダメダメダメ」

「何がダメなんだ？」

「いや、もうひどいのなんのって。電気は消えているし、パレットも崩れているし、タン
クも横倒れになってるし、全然もう、なんともならない」

たしかにあの大揺れでは、大変な状況だったのでしょう。

「ああ、そうだよな。でも人はどうした？」

さらに聞くと、

「みんな逃げろってことになって、家に戻ったか山に逃げたか、とにかくみんな工場から
は逃げた」
ということでした。

このときはまだ、津波が来るとも知らずにいたわけですが、ただ、現場の一部の人間は、
地下水があふれ出てきていたのを確認していたようで、「これは下手をしたら津波の可能性
もあるぞ」というので、「なるべく高台に逃げろ」という指示が出されていたようでした。
ほどなくして、社長（私の兄）も、最後に工場のカギをしめて、自宅に戻ってきました。

裏のアパートの敷地は、１メートルくらい土台が高くなっていて、そこに駐車場もある
のですが、戻ってきた社員たちはここにいつものようにクルマを停めていました。

今思えば、アパートの裏が山になっているので、そのまま山までクルマで行ってしまえ
ばよかったのですが、このときは、大津波のイメージというものが誰の頭にもありません
でした。

万が一津波がきたとしても、海から２キロくらい離れている場所だし、土台が１メー
トル高いということもあって、まさかここまではこないだろうという多少の安心感があっ
たのです。

ところがです！ ラジオを聞いていたら「女川に10メートルの津波がきた」というではありませんか！

これには、みんなが驚きました。

「え、10メートル？」

「今、10メートルって言ったよな？」

互いに、今この耳で聴いた言葉を確認し合っていました。

女川は石巻のすぐ隣の町です。太平洋に突き出た牡鹿半島側にある町で、地形的に女川のほうが海の正面になっているので、津波の到達時間が早いわけですが、とはいっても目と鼻の先です。結果的には、女川に津波が到達してから約5分後に、石巻にも津波が到達しています。

外に目をやると、さっきまで薪拾いをしていた向かいの家の人たちが、リュックサックを背負って逃げようとしているのが見えました。

「うちらも逃げなくちゃ、山に逃げる？どうする？」と、家内と話していたところに、工場からちよと息子が帰ってきました。

息子は、工場で避難指示が出されたあと、何力所か知己の家を見まわったりして帰って

きたということでしたが、なんだか放心状態になっていました。

そうこうしていると、陥没していた道路のあたりに波がスーッと押し寄せてきたのです。

津波の第一波です。

「え、津波だぞ、きたぞここまで！」

それでも、わが家の敷地は道路側より高くなっていることもあって、まさかここまで水が上がってくるとは思っていませんでした。

それで、息子が外に停めていたクルマを「アパート側のほうへ移動したほうがいいんじゃないか」などと言っていたのですが、そのような悠長なことをしている場合ではなかったのです。

津波の威力というのは、私たちがイメージしているのとはまったく違います。勢いがもう全然まったく違うのです。

とにかく、最初にサ と水が見えたと思ったら、そこからの水かさの増し方が半端ではありません。

みるみるうちに、私の愛車が入っていた車庫のシャッターが、バリバリバリという轟音とともに津波に飲みこまれていきました。

一刻の猶予もありません。家内と息子に「よし、逃げるぞ！」と言ったのですが、今さら逃げると言っても、もう山側には行けなくなってしまうました。

家の裏のアパートが4階建てでしたので、そこに避難するため、裏庭を全速力で走りました。

アパートにたどりつく前に足元にザザザザーと水が流れ込んできて、その水の中を3人で逃げ、やっと4階の部屋までかけのぼり、ギリギリ滑り込みセーフ。

そこには、社員が8名いました。ここまでくれば何とか命は助かるだろうとは思いつつも、みんなただただ怯えながら、いつ自分たちのところにも襲いくるともしれない津波の姿を見ているより他にありませんでした。

あつという間に自宅の1階が水でいっぱいになるのが見えました。駐車場に停めていた社員たちのクルマが波に飲まれて浮いた瞬間、全員が「ああ……」とため息をもらしました。それからはもう、見たことも聞いたこともない世界が広がっていききました。

木材は流れてくるわ、看板が流れてくるわ、クルマは流れてくるわ、建物が流れてくるわ、そして人間までもが……。

そうこうしていると、津波に飲まれた人が、私たちのいるアパートに流れついて、通路

にはさまっていました。社員たちがみんなで助け出したのですが、あれには2時間くらいかかりました。その人はケガもしていたので、2階の部屋にずっと寝かせていました。

地震直後から津波がくるまでは30分くらい時間があつたのですが、第一波で足元に水がきてから、街が飲み込まれていくまでは本当にあつという間のできごとで、さっきまで何ごともなかつた石巻の街が、ほんの3〜4分で壊滅です。

何十年何百年と時間をかけ、ご先祖から代々受け継いできた土地も建物も、ほんの数分でなんにもなくなってしまったのです。

自然の力というのは想像を絶する威力です。どうすることもできません。人間は、ただ恐怖に震えることしかできません。あれは、見たことがない人にはちょっとわからない世界であり、恐怖です。

ある程度水がくるところまできて止まったとき、あたりはもう真っ暗になっていました。すると今度は、雪が降ってきたのです。寒くて寒くて、なんでここで雪まで降ってくるのかと、真っ暗な夜空をガタガタふるえながら見上げていました。

しかし、何より辛かったのは、暗闇の中、あちこちから叫び声がしていたことです。とくに、女の人と子どもの声が悲痛に響いていました。「助けてー助けてー」と、聞こえては

くるのですが、どうすることもできません。

「がんばれー」

「水引くと思うからがんばれーがんばれー」

そうやって声をかけ続けることしかできないわけです。

あのような光景を地獄というのでしょうか……。

さっきまでは何ごともない平和な世界にいた私たちが、いきなりゴロリとひっくり返されて、いったいどう対応していいのかわからない。現実を目の当たりにしながらも、激しいギャップで切り替えられないわけです。

私たちのいた場所の近くの民家の屋根に、若い男性がへばりついて避難していました。

私たちはそれでも鍋に灯油を入れ、それを燃やして暖をとることができたのですが、雪が降りしきるなか、彼はずつと屋根にへばりついていました。

「がんばれよーお兄ちゃん」とか、「とっから来たんだ」などと、声をかけ続けました。

次の日の朝になると、ウエットスーツを着た人が救護でやってきました。レスキューや警察とかではなくて、一般の方でした。

その救護の人間を見つけた私たちは、屋上から、「こっちの屋根のところに人がいるから

助けてくれー、行ってみてくれー」と声をかけました。すると、「わかったー」という声が返ってきて、すぐにその彼のところに向かっていきました。彼は無事に救出されました。いろんなドラマが瞬時にあったわけですが、自分がそんなことの主人公になるとは思っていませんから、突然にそんな事態になって、とにかく切り替えが効かない状態で……、結局私たちは、そのアパートの4階で4日間暮らしました。

仲間たちと越えた死線

その間、山に逃げた社員たちとも3日目に合流しました。

社員のひとり、山のほうを見て、「今、手を振っているあれが山に逃げた連中じゃないか」というので目をこらしてみると、たしかに私たちのいるアパートに向かって一生懸命に手を振っている人間が数名見えました。震災から3日目になり、やっと水がひぎのところくらいまでひいていたこともあって、その社員が「とにかく、瓦礫の上を乗り越えて行ってみる」ということで、山に向かいました。

行ってみると、やはりみんながそこにおいて、クルマの中でじっとしていたようです。そ

して、そこについてもどうにもならないからというので、全員でアパートにやってきました。もともとアパートに住んでいた人間もいて、部屋の中になにか食べ物があるだろうというのでカギを開けて部屋に入り物資を調達すると、それで飲み物や何かをみんなで分け合っただけのことができました。

建物に取り残された状態で避難している人間は、「孤立」している人たちということでもマスコミ等では報じられていたと思いますが、まさに私たちもこの状態で、3日目には20名ほどの集団になっていました。

5日目、約1キロ先の湊中学校のところに、ヘリコプターが見えました。じつは、湊中学校にも社員が何名か避難していたのですが、そこにも4日目に社員が行っていて、アパートに彼らを連れてきていました。

「ヘリコプターがあそこに見えるけど、何してるんだ？」

と、それまで中学校で避難していた彼らに聞いたところ、「孤立している人たちを中学校に移動させているんだ」というわけです。

じつは、衛生問題上も、このアパートでこれ以上暮らしていくにはかなりキツイ状態になっていました。そこで、みんなで話し合った結果、避難所に移動することにしたのです。

5日目の朝、私たちもヘリコプターに乗せてもらい、中学校に移動させてもらったのでした。

避難所になっていた体育館でようやく社員がみんな集合しました。同じグループだからみんなだまどまどしているということになり、社員の家族や関連の人たちも含め、総勢40名の大所帯で過ごしました。

じつは、震災の日に、この日に限ってなぜか大阪と東京から販売会議で営業の人間がきていました。

もっとすごいのは、韓国から、エビの買い付けでお客様までいらっしやっていたことです。その方は、毎年うちのエビを買ってくださっている会社の社長さんで、今年もそれを見て、いつものように仙台空港まで迎えに行こうとしたところ、「1度自分で電車で行ってみたい」というので、「それでは、どつぞどつぞ」ということになり、わざわざ電車で石巻まで来られたのです。

そして、会社に着いて、応接間で弊社社長と握手したとたんに地震がきたというわけです。まさにこの大震災を体験してきたとしか言いようがありません。

ともかく、お客様を殺すわけにはいかないので、エビの担当がいの一番組

お客様をクルマに乗せて山に逃げたのですが、震災の日からずっとこの社長さんも避難生活を送っていたわけです。

3日目に山から戻ってきて私たちのいるアパートで合流したときには、「わあ、生きていたんだ、心配した。社長を殺してしまったら大変なことになっていた」と、無事の再会を喜び合いました。

「おそらく私の奥さんは、死んでると絶対思っているでしょう」と、おっしゃっていたのですが、ムリありません。あのすさまじい映像が全世界にむけて送られたのですから。

みんなで避難所に移った5日目になって、やっと交通の便も目処が立ってきて、営業の人間は山形経由で、また、韓国のお客様は秋田経由で、無事に戻って行きました。あとでこの韓国の社長さんから聞いた話では、韓国に到着すると、日本から帰ってきた人たちはみんな大歓声で迎えられたそうです。あの大地震をまともに体験して、「どうだったんだ」「よく生きて帰ってこれたな」と、英雄になったかのようなことでした。

弊社には、関東、東海地方出身の社員も何名かいるのですが、その人たちについても、交通の目処がたった時点で、当分操業はできないだろうし、ここにいってもどうすることもできないので、いったん自宅に戻るように指示を出しました。

弊社には中国人スタッフが13名在籍しているのですが、彼らの場合は、異国の地でこのようなことになって、本当に何がなんだかわからない状態で、不安は相当なものでした。とにかく、「オレらがついているから大丈夫だ」と言って励ますことしかできなかったのですが、間もなく、中国政府から救援の連絡がありました。

弊社だけではなく、石巻・女川地区の企業には、中国人スタッフがたくさんいるのですが、その人たちを全員、新潟空港まで連れて行くためのバスが手配されることになったのです。これには中国人スタッフ全員が大喜びでした。

集合場所は日赤病院前だったので、みんな荷物をすぐまとめ、引率の社員と一緒に約1時間かけて、瓦礫の中、道なき道を歩いて行きました。

40名だった大所帯も、ここで10名ほどになっていました。まずは一安心して、私ら家族も一時的に秋田の親戚のところにお世話になるため、避難所を後にしました。

震災から7日がたち、この日にやっと入浴をし、衣服を着替えることができました。

秋田には4日間いて、それからまた石巻の様子を見に戻ってきたのですが、わが家ももう、片付をするというレベルの話ではなく、家の中はまだ水びたしでグチャグチャになっていたし、ドアもハンマーなどを持って行かないと開かない状態でした。

じつは、わが家の庭には、津波がひいたあとに7名のご遺体が残されていて、その後も、クルマの下から2名のご遺体が見つかっています。

地震も津波も凄まじいモノでしたが、その後に残された光景もかなり壮絶で、これよくぞ助かったものだ、改めて思わされました。

あの大地震と大津波をあの地区で受けた人たちは、私のみならず、みんなが自分の目の前に死の壁がきたわけです。そこで、生きた人と死んだ人の違いは何か？ なんてことはない、間一髪紙一重。みんなそうです。

人間にはやっぱり、DNAの中に、「ああもういいや、私死んでもいい」と、死の壁を前にしてあきらめる人は誰もいなくて、そうした極限状態になったら何をするかというと、やはり瞬間的に逃げるのです。しかも、とてつもない集中力で逃げるのです。

話には聞いたことがありますが、そのときというのは、場面がみんなスローモーションです。

死の瞬間から逃げるという極限状態、微塵も余裕はない状況では、「準備していたように逃げました」という人は誰もいません。

死を目の前に瞬間をどう判断するかというのは、自分でもわかりません。屋根に一昼夜

へばりついていてあの彼だって、それまではクルマを運転していたわけです。それがもうダメだとなったときに、瞬間的にクルマをピヨンと脱出したから助かったのです。

乗り移るその瞬間のことなどは、よもや自分でも想定してはいないことです。それが、一瞬にしてワッと逃げられるというのは、やはり本能というのか、人間の持つとてつもない底力というものでしょうか。

セブンイレブンの屋根の上のぼって逃げた人も、あとから考えたらどうしてあそこに登っていたんだらうか」などと、助かった人はほとんどそうです。

ともかく逃げ切った。なんとか目先助かった。さあ次はどうするかということになったとき、余震がずっと続いていたので、まずは避難するときの準備を徹底して行ないました。すると、やはり震災から1カ月後に大きな余震がきました。

今度は、あの大津波のイメージもあるので、みんながバーンと逃げました。津波警報の広報が耳に入るや、私も避難場所へ一目さんに逃げました。

けれども、クルマに乗ってエンジンかけて「さあ行くぞ」というところまでに行けなかったかという想定していたことの半分しかできていなかったのです。あれも忘れている、これも忘れている、あれはどこに置いていたっけ」と、そんな状態です。

家内の友だちのある奥さんなどは、就寝時でしたから、とにかくGパンをはいて逃げようというので、一生懸命にGパンをはこうとしたのですが、それがなかなか入らなかったそう、「なんで入らないんだろっ」と思ったら、パジャマを脱いでいなかったというわけです。

わかっただけでも、瞬間パニックになってしまつたのです。備えあれば憂いなしといいますが、備えがあつても憂いだらけなわけです。よほど訓練をしていないと人は冷静にはなれないものだと思います。

帰らぬ仲間への誓い

じつは、震災5日目になって、みんなで避難所に集合しても、一人だけどうしても連絡のとれない社員がいました。奥さんとは連絡がとれたのですが、本人とは4日たつても5日たつても、1週間たつても連絡が取れませんでした。

地震の後に彼が自宅へ逃げたことまではわかっていました。じつは、一番ヤバイところです。彼の家は海に近い地区にあるのです。

震災後、奥さんとやつと連絡がとれたとき、「奥さんはどう思っつ」と聞いたら、「あの人は生きてるような気がします」と言っていました。

「そっだよね」と答えたのですが、3週間くらいたつたときに、彼はご遺体で発見されました。

不思議なことに、自宅付近からではなく、まったく反対側の私たちが4日間避難生活を送っていた4階建のアパートのすぐ近くで発見されたのです。

あとになつてこつちに向かつてきていたのか、それとも津波に飲まれてここまで流されてきたものか、今となっては何もわかりません。

ですが、これまで苦楽をともししてきた仲間たちのそばで見つかったということに、彼の生前の温厚で誠実な人柄の良さと、責任感の強さを感じずにはいられません。

唯一無二の大切な私たちの仲間を失ったことは耐えがたい辛さではありますが、彼のためにも残された私たちは、これからの未来をたくましく切り拓いていかなければならないと思われました。

今年、弊社では新卒者2人を迎え入れました。震災のため、従来のような入社式は行いませんでしたが、わが社のトレードマークでもある高さ10・8メートルの「世界一の缶

詰」の前で記念写真を撮りました。

工場の脇にあった缶詰ですが、今は、津波に飲まれて300メートルほど転がっていった先の道路の真ん中にあります。

そこに、彼の奥さんもお呼びして、彼の遺影と一緒に社員みんなで撮影しました。

ちなみに、火葬場がとても混雑していたことから、市内のサッカー場には仮埋葬の場所が臨時に設けられました。たむけられた花束の前にプラカードが掲示されていて、そこに番号が記されています。最初は何なのかわからなかったのですが、あるときクルマで通りかかったら、和尚さんの姿が見えて、やっと意味がわかりました。

あの光景は、なんといえはいいのでしょうか、ちょっと言葉が見つかりません……。受け入れられるものではありません。

惜しくも亡くなられてしまった方には、心よりのご冥福を祈るばかりです。

もちろん、100年に1度の大不況もリーマンショックもかなわない、1000年に1



度の大震災なのですから、生きのびた私たちには問題が山積しています。生きるも地獄、死ぬのも地獄とおっしゃる方がいますが、それでは、亡くなった方々も私たちも一生浮かばれません。

生きて極楽の世をつくるため、私たちは命を与えられたのだと思うし、亡くなった方々もそんな世の中をみたら安心して極楽に行けるようになるのだと思います。少なくとも、そのように考えなければ救いようがありません。

「奇跡の缶詰」への軌跡

震災から約3週間後、地域の水産会社の人間がみんなが集まって、第1回目の復興会議が開かれました。

「おうおう、生きてたか」

「ああ、生きてたよ、いがったいがった（良かった良かった）」

「生きてただけでいいさ」

「借金もなんもいっぱいあつけど、こんなのいいさ、命あつただけでいいべ」

そんな言葉と笑顔であふれ、みんなで握手し合い、抱き合いました。

第1回目の復興会議は、こうして、互いの生存確認をし、喜び合って終了しました。

1週間後、今度は具体的に「これからどのようにやっていくべきか」を話し合うために再びみんなで集まりました。すると、いろいろな意味で現実がボロボロと出てきたのです。

「工場が流されて、借金だけ残ったよー！」

「どうしてくれるんだ、国と県は金を出してくれるのか？」

「社員はどうする？」

「うちは全員解雇した」

第1回目とは一転し、そういったシビアな会話が飛び交いました。

いろいろな会社の意見や動向を伺いながら、弊社ではどうするか？ 本当に思い悩みました。しかし、想定外のこと起きたときでも、いえ、そのようなときだからこそ、経営者は迅速な判断と実行が要されるものです。

結果的に、出した答えは、「解雇ではなく、休業でいこう」ということでした。採用予定の新人も入れることにしました。

休業補償期間を1年間として、「果たしてその時までには復活できているのだろうか？」

いくら考えてみたって、それは誰もわかりません。先のことはまったく見えません。それでもこの段階でコマを進めなくてはいけないという状況の中、いろんな考え方があるとは思いますが、「今だからこそみんなの力が結束し、絆が深まるのだし、それが今後、営業が再開された時には必ず生きてくる」という判断でした。

そして何より、社員がいるということは、確かに大きな負担ではありますが、これが家族だったらどうでしょう？ 一家の大黒柱がそうであるように、「何としても家族を守らなければならぬ！」と思えばこそ、死に物狂いで働くこともできるし、額に汗して知恵をしばることもできるのではないのでしょうか。

社員たちを助けることが、結局は、自分達経営側の底力の糧にもなるように思えるのです。大きなプレッシャーではありますが、座して死を待つわけにはいきません。なんとかならなくてもなんとかしなければいけないのです。

それに、私どもの缶詰を「ご贖戻にしてください」ださっている全国のお客様、関連会社の皆様よ、震災の日からずっと「缶詰どうなってる？」「皆さん大丈夫？」「今どうしてるの？」何か足りないものがある？ うちから送るよ」といった電話やメールが、送られてきているというのも大きな励みであり、勇気となり、背中を押してもらえました。本当にありがたく

嬉しく思っています。

ある時、「缶詰は津波で広範囲に流されてね」と実情を伝えると、「それ拾えないの?」とおっしゃる方がいて、「拾えるけど、こりや大変だな」ともらすと、「ぜひ拾ってちょうだいよ、大変ならこっちから手伝いに行行って拾うから」というのです。

震災の日から1カ月間くらいは、被災者の皆さんがうちの缶詰倉庫に缶詰を拾いにきていました。それで命をつないでいたというので、「命の缶詰」と言われていたのですが、震災から数日して最初に倉庫を見に行った時には、被災者の人たちが、食糧調達のために、倉庫で転がっている缶詰を拾いにきていました。

「お前のとこの缶詰もらって食ってたぞ」

「これで本当に助かったって、みんなに言ってくれ」

「この缶詰本当にウマイな」

24缶入りのケースが、倉庫から1キロ以上離れた友人の自宅の庭にまで流されて、「助かったよ」と言ってくれました。

とにかくみんなが苦しいときでしたから、「どつぞどつぞ」と言って差し上げていました。

泥にまみれ、あたり一面、数10万個、ひよつとしたら100万個は転がっているかもしれない缶詰は、たしかに、拾って食べたのなら、それはそれで食べられます。缶詰ですから、破裂してでもないかぎり中身はそのまま変わらない味なのです。

震災から1カ月もたつと、ようやく、いろんなことが少し落ち着いてきていて、食糧もなんとか調達できるようになっていたの、缶詰を拾う必要もなくなっていました。

休業中の社員も何もすることがなかったということもあり、それで、拾った缶詰をゆずってほしいというお客様の声にお応えすることにしたのです。

とはいっても、電気も水道も通っていない状況でしたから、拾った缶は汚れたままです。「汚れたままだけいいの?」と、お客様に聞いてみると、それでもいいということだったので、全社員の「缶拾いボランティア」が始まりました。

1缶につき300円の義援金をいただくことができ、社員たちに生活費として分配されることになりました。津波でラベルが剥がれたので、商品として販売できませんので、義援金をいただい



た方に缶詰をご提供する形を取っています。

自分たちがこうしようと思っただけのことではなくて、どん底の中で、お客さんからそういうアイデアをもらって助けられたという、まさにこれこそ「奇跡の缶詰」であり「絆の缶詰」なのです。

津波に飲み込まれてラベルはとれてしまいました。今は電気も水道も通っているのですが、キレイに磨いてお出しすることが可能になりました。

すぐにこの活動はいろいろなところに知られるようになって全国各地からボランティアの方々もかけつけて下さるようになってきました。4月下旬から8月上旬まで、累計3500名のボランティアに手伝っていただきました。

芸能人の方もたくさんかけつけてくださって、「今度はジャニーズだなー」などと、冗談で新入社員の子と話していたら、本当にジャニーズのタレントさんが缶拾いに来てくれたのです。



新入社員の彼女は、家が津波で流されてまだ避難所で生活をしているのですが、そこにジャニーズのタレントさんが彼女を取材に行ったものだから、避難所が一時パニックというか、大いに湧きあがったようです。

辛い思いを抱えていた彼女ではありませんが、あとで見せてもらった小山君とのツーショットには、心からの笑顔で写っていました。喜ぶ彼女の姿をみて、私も嬉しくなりました。その彼女も、今は一所懸命に拾った缶詰の洗浄をしています。まさか内定がきまった頃には、入社していきなり、倉庫で何10万個と転がっている缶詰を拾うことになるとは思っていませんでした。

プロジェクト発進！

ところで、どういうわけか、テレビでも新聞でも、被災した水産加工会社はたくさんあるのに、弊社にばかり取材クルーがやってきて、「復興のためにがんばってください」「木の屋さんはぜひたいやりますよね」といったことをよく言われました。

沢山の励ましの声が後押しというか、背中を押してくれているというか……、他の会社

には、そのような機会がほとんどないという状況からしても、何か神様がそうおっしゃってくださっている、差し向けてくださっているようにも思えてならないのです。

経営者ですから、当然、デジタルな計算はしなくてはならないわけですが、船井本社社長の船井勝仁氏が震災後にかけてくださったり、復興のプランと一緒に考えてくださったのですが、そこで「やるよね？」と言われて、「はい」と答えたのが「三陸海産再生プロジェクト」のスタートでした。

今回のメインテーマでもある「三陸海産再生プロジェクト」ですが、どういった内容のものであるかをご説明させていただきますと、これは、この度の東日本大震災によって壊滅的な被害を受けた三陸地方の漁業および水産加工業を、自発的な参加を通して再生すると同時に、あらゆる垣根を越えた共生社会もモデルを構築することを目的とした計画事業です。現在、この目的を達成するための大前提として、「漁協の再生に必要な港湾等の整備、漁船および漁業資機材の調達」と「水産加工業の再生に必要な整備、資機材の整備・調達」、つまり、具体的な復興作業が急がれるところです。

これまでに地方自治体をとおり、全国、そして世界中からいただきました義援金は、湾

岸等の整備など、主に公共の場といえますが、ハード面的なものに投じられています。

現実的には、船が調達できないとか、網を買うお金が調達できないとか、加工や出荷施設が整わないとか、直接的な面での整備がまったく手つかずの状況です。まずは、1日も早くこの現状を改善する必要があります。

そして、準備ができ次第、お届けのできる海の幸から順次、皆様に、直接、会員価格でお届けし、また、復興状況につきましては、随時、ホームページやニュースレター等でお伝えしてまいります。

「義援金がどのようなところでどのように使われているのかわからない」という声が多いと聞いておりますが、このプロジェクトでは、皆様からいただいた会費で、「さんが船を調達できました」「網を調達できました」「その船で獲ってきた魚です」などといったことを随時発信していくので、これはいわば「義援金の見える化」を可能にするものでもあります。

本当に大切なもの、価値のあるものは何か？

正直、コマがひとつ進むことで、それが左に倒れるものか右に倒れるものか、全然わからない状況です。ですが、いま私たちがしなければならぬのは何かといたら、わからなくてもとにかく何かをしなければならぬということです。

先行きは全く見えない状況ですが、壊滅的打撃を受けた三陸沖の水産業を復興させることは、絶対の任務であることだけは確かです。

また、そう思ったとき、私は無意識のうちに「結局、今までの水産業というのは何だったのだろうか？」ということをふり返つてもいました。

先代から引き継いだ水産加工会社を、35年の長きにわたり兄とともに経営してきたわけですが、考えてみれば、震災に遭う前から、今の水産業界にはいろいろな矛盾点があることを感じていました。そのことが、工場も倉庫も、何もかも失ってしまつて、まったくゼロ状態、原点に立たされたことで、一気にクローズアップされてきたのかもしれない。

ともあれ、これまでの水産業界は、それはそれでうまくやってこれたと思っています。しかし、こういったことは、何も私たちの世界だけではなく、どのような産業、仕事でもいえることだと思つのですが、ある程度の年数が過ぎ、歴史ができてくると、やはり今の時代にはそぐわない不都合なことも出てきて当然でしょう。

なおかつ私は、漁業をはじめ、日本の第1次産業の厳しさというものに、強い危機感を感ずるもいました。

キツイ、汚い、危険、いわゆる「3K」産業でもある第1次産業は、これだけでも大変なわけですが、さらに報酬、所得が低いという、実に厳しい業界であることは今さら論じるまでもありません。

漁師さんなどは、朝早くから漁に出て、「板子一枚下は地獄」という過酷な現場で働き、それで年収が200万円前後という人もいます。

このような状況では、いつ生活が立ちいかなくなつてもおかしくはないし、何より後継者があらわれません。

自分で魚を獲らなくてもお金を出したら買えるのだから、命がけで働いて年収がその程度だったら、誰だって、ラクしてそこそこ稼げる仕事を選んでしまはずです。今の経済システムからいけば誰もがそのように考えてしまつし、現実的にそうなっています。

この言葉が適切かどうかはわかりませんが、第1次産業従事者、生産者、われわれ加工業者というのは、今の経済システム全体からみたら、けっこう貧乏くじの方だと思えます。

こんな辛くて、沖に出ればひとつ間違えば死ぬわけです。命がかかっているのに、年収

200万円？ 農家の方だってそうです。汗して一生懸命に作物を育てても、サラリーマンとは比較にならないくらい年収の低いところが多くあります。それも、台風や災害にやられたら、報酬はあつというまにゼロです。

極論すれば、第2次産業や第3次産業がなくなっても人は生きていけます。しかし、第1次産業がなくなったら、食糧がなくなったら、たちどころに人間は生きてはいけなくなってしまうのです。なのに、一番大切な「命」というものを支えている第1次産業の人間が、報われているとは言いがたい状況が、延々この国では続いてきたのです。

「1次産業なんて別にどうだっていいんじゃない」「日本人は金持ちだから、国内でつくらなくても、東南アジアの国から安く買ってくればいいよね」という、そういう方向で進んできたわけです。

「これって、大きな政策として間違っではないだろうか？」そう感じているのは、私だけでしょうか？

確かに今はいいかもしれませんが。

ですが、異常気象や環境の変化等で、今後もしも東南アジアの国々が食糧難になったときに、果たして彼らは日本に食糧を売ってくれるのでしょうか？

食べ物というのは、お金のかわりに手に入るものですが、どんなにお金を持っていても、もともとの現物がなかったとしたら、どうすることもできません。

震災後、被災地はもちろん、都内スーパーでも、水や紙製品、乾電池等の物資が消えたといえます。どんなにお金をもっていても、売っていなければ手に入れることはできなかつたのです。

あのような状況が、もし食糧で起きたとしたら……。どんなにお金があつたとしても、札束をつんでも、ヤギならともかく、腹の足しにはなりません。

「じゃ、お金っていったいなんなんだ？」と考えたときに、ここ数10年、日本人はお金のために仕事をするという発想できました。

「お金お金お金。お金がほしいんだ！」

「何のために仕事してるの？」

「金、金持ちになるため」

お金があればそれですべてが叶うかのような思いで生きてきました。

ところが、今回このような震災に遭って、お金がいくらあっても無意味だということに、多少なりとも気づかされたわけです。

お金に価値があるのではなくて、本来は物資に価値があるのだと。そういう意味で、本当の根幹となる第1次産業を従来のままに扱ってはいけなく、やはり自給率を上げて100%を目指すことが何より大切なことだというのはいうまでもありません。

価値観の根底をもう一度大きな意味で見直さなければ、このままでは、日本という国は根底からひっくり返ってしまいます。

争い続ける社会から、助け合う社会へ

なぜ、缶詰が100円でなければいけないのか？ そんなふうに価値を決めたのはいったい誰なのでしょう？

獲ってきた魚に誰が値段つけているのか？ 表面的には、消費者がつけているということになってはいるのですが、違います。

消費者は、店頭で並んでいる缶詰をそのまま何の疑問もなく手にしているだけです。

漁師さんが重油をたいて沖に船を出し、命をかけて獲ってきた魚が、市場にあげたら全然採算に合わない値段がつく。本当は200円はもらわなければやっていけないものが特

売セールをやるから、50円でよこせ」と、そう言われれば、従来のシステムでは、採算に合わなくても魚を渡さなければなりません。

なぜ、漁師さんが自分で値段を決められないのでしょうか？ なぜ安く買ったたかねければならないのでしょうか？ これでは命を切り売りしているも同然です。

消費者の方と直接お話をさせていただく機会がある度、私はこのことを一生懸命にお伝えしているのですが、消費者の皆さんは一緒に、「そんなことになっていたとは知らなかった」「けっして私たちは、そんな安い98円を望んでいるわけではありませんよ」などとおっしゃいます。

つまり、消費者はブラックボックスをつくられて、何も知らされず、「お客さんは安いほしいですよ。じゃ、まかせてください」というので、ただそれを買っているにすぎないのです。

本当は300円くらいの価値のあるものを、販売店が100円損をして店頭で並べるのなら話は別です。そうではなく、それを全部生産者に押し付けてしまっていることが問題なのです。

今はいいかもしれませんが、そうやって一番根底を支えている人間をいじめてい

くと、どんどん負のスパイラルにはまってしまってしまい、最終的に全員がダメになってしまいます。そして、まさに日本はその寸前だったように私は思います。

この「三陸海産再生プロジェクト」は、復興ではなく、あえて「再生」という言葉を使っています。

これは、三陸沖の水産業を復興するにあたり、今こうしてお話させていただいたように、従来のシステムをあらため、価値あるものに本当の価値を見出すこと、つまり、(ア)ラックボックスをとおさず、(イ)国家の根幹を担う第1次産業の人たちと、加工業者、消費者が三位一体のタッグを組み、誰かが得をして誰かが泣きを見る、バカをみる、さらには、将来的に国力を衰退させることになる現在の短絡的な経済のシステムから、本当の意味で国力を高め、誰もが幸せになれる経済システムをもつ新たな時代をつくっていかうという意味からつけたものです。

単なる復興のみならず、何もかもがゼロになって原点に回帰した今だからこそ、それができる。つまり、依存し、奪い合い、争い続ける社会ではなく、自給し、分かち合い、助け合う新たな社会のモデルを被災地発でつくれるものと確信しています。

そう考えたのなら、従来の経済システムの矛盾にさらされてきたこの国が、破たん寸前

のところ、あの震災が起きてしまったことは、大きな意味があるようにも感じられてなりません。

1000年に1度ともいわれるあの震災で私たちは、人生の原点、生活の原点、人間関係の原点、経済の原点など、たくさんの原点を考えさせられ、本当に大切なものはなんだったのか、それがやっと思えてきたように思われます。

たくさん尊い命、美しかった三陸海岸の風景、失ったものはあまりにもむごく大きなもので、その代償ははかりしれません。しかし、そのことがこの国を寸前のところで守ってくれたように思えてなりません。

だからこそ私は、本気でこのプロジェクトを成し遂げようと思ひ、成し遂げるまではとことんやる覚悟で今もこうしてここに立たせていただいているのです。

幸せの本質

実情を申し上げますと、地域の水産会社の人間がみんな集まって行なわれた復興会議は、回を重ねるごとに、だんだん怒りの声があらわになっていきました。

「早く金をよこせ」「行政は何をしているんだ」「早く瓦礫をかたづけろ」「国の対応が遅過ぎる」など、どれも不平不満の声ばかりで、まったく前向きな意見というもの出てきません。

すべてが依存の声で、自分たちでこうやりたいとか、こうやると喜ばれるとか、今までこういう問題があったから変えるチャンスだとか、そういった意見がまったくといっていいほど出なかったのです。

チャンスというと不謹慎ですが、この事態は、一刻も早くチャンスに置きかえないとマジと私は考えていました。ですから、「ピンチのままでいていいのか！ 早く置きかえようよ」そう訴えてきました。

もちろん自分たちだって被災者です。水産業の人間のみならず、石巻の人たちはみんな被災者です。

そこに、日本中から世界中からボランティアの人たちがやってきて、本当にありがたかったし、スゴイものだと感動しました。それは、私のみならず誰もが同感です。

ですが、自分たちには過去にああいったボランティア精神があったか？ と聞かれたら、私をはじめ、誰にもそれはありませんでした。

いろんなボランティアのカタチがあり、いろいろな人たちがいて、助けてもらったわけですが、そうした方々の行動から私は、同じ石巻市民の中で、自分ほどのポジションなのかということ考えたとき、自分たちも被災はしているけど、それよりもっとひどい目に遭っている被災者を救うくらい気持ちになっていかないと、基本的に間違っているのではないかと強く思われました。

自分たちは目先助かった、「ああよかった」というだけではなく、会社なら会社のなかで被災の状況はいろいろあるわけですが、そのなかで一番困っている人をみんながサポートして助けることが必要なのではないかと気づかされたのです。

人のために何かができるのは今しかないのだし、逆にいえば、「その人を助けないでどうするんだ！」ということなのです。

このときの決断が、目先のことだけではなく、永遠に続くことを私は訴えました。この局面で自分の会社の社員を助けることは、今度いつか本格営業が再スタートしたときに、「何のために仕事をするのか」という一番大事な部分をゆるぎないものにしてくれるのだと思っただけです。

人間はなんのために生まれてきたのかというところまで掘り下げていったら、それはや

はり成長するためではないでしょうか。そして、その成長というのは、お金のためというのではなく、誰かのため、世の中のためになることをしてはじめて実感できるものではないでしょうか。

それが何かといたら、今一番苦しい人を助けることにほかありません。

「自分たちも助けられたら、ボランティアさんに。いろんな米持ってきてもらっただろ、ほら、あのときどうだった？ 嬉しかったよな。ありがたいつて思っただら。だったら、自分たちだって、自分たちより困っている人をここで助けないでどうするんだ」

シビアな意見が飛び交う復興会議のなかで、私はそう訴えていました。そして

「平時になって、いざ仕事をするっていつときになっても、その精神、人のため世のため、誰かの助けになる仕事をしていこうというやり方でなければ、みんなが幸せになっけないし、社会というものも成長していかないんじゃないか」

そのようにも訴え続けました。

人は誰もが、自分が幸せに生きようと思っと思っていますが、結局その幸せが何かとといったときに、「人に何かをしてあげて喜ばれたとき」その瞬間に本当の幸せを感じるように思います。

ですから、義援金をいいただいて良かった良かった、というだけではなく、それ以上に、その恩義に報いてもなおあり余るほどの喜びをお返ししようと立ち上がり、そしてそれが本当にできた時にこそ最大の幸せが感じられるし、魂が震えることなのではないかと思うのです。

じつは、こういった、いわゆる「理想論」的なことは、今までも言葉ではわかっているつもりでした。ですが、経営という任務に直面すると、「とはいつても、ある程度は金儲けしなくてはいけないし、先立つものがないとやってけないよな」と、どうしても資本主義の現実世界に戻されてしまっていたのです。

どんなに志を高く掲げていても、収益の分岐点といったものは死守しなければならぬなどと、瞬間そっちにふれてしまうと、そのことに執着してしまう部分とつのが、どうしても今の資本主義を生きていると発生してしまい、それが、苦しみにつながっていくわけです。

この資本主義というものを何かのいい別の主義に変えたいということはずっと考えながらも、口で言っていることとは違うことをやらざるを得ない部分が出てきて、理想と現実のはざままでゆれていたとき、まさにこの震災に遭ったわけです。

船井代表が駆けつけてきてくださり、今回このプロジェクトの話になったときに、思わず「はい」と手をあげたことも、こつした経緯があり、決意の大きなきっかけになったことはいまでもありません。

このプロジェクトこそ、ある意味で、資本主義にとって変わる新たな社会システムのスタートだと思っています。

消費者と生産者と私たちが理解し合って、商品を取引していく。物々交換をするのは現実的ではないので、従来通りにお金でのやりとりということにはなるわけですが、余分なお金が発生した際はお客様に還元していくので、どこにも余分なお金が発生する仕組みはありません。

そうやって、みんなが安定して生きていけることができれば、何もそれ以上を求める必要はないはずだし、本来これが全体の幸せにつながるやり方だと思っております。

それが、一部の人のみが莫大にお金が儲かったりして、それで余分なお金を投資しようといった、お金からお金を生もつとつするから世の中がおかしくなってしまうのです。

もともとお金というのは物々交換をしやすくするために便宜上つくられたものであって、それ以上にお金を活用とする必要はありませんでした。

それを人間がちょっと知恵を使ってしまい、結果、リーマンショックでもって爆発してしまつて、今の実社会を犯そうとしているわけです。そういう意味では資本主義はとつとに死んでしまっているといえます。

すべてがこの資本主義の延長線上で、米とか食糧までも扱っていったら、世の中は絶対にダメになってしまいます。一番価値の高いモノが何かといえば、それはとりもなおさず、命という大切なものを支えている第1次産業です。そこにしっかりと目を向けなくてはなりません。

輝く未来の日本へ向かつて

今回の震災では、世界各国に日本人の冷静さと品性がこぞって取りざたされましたが、日本人というのとはもともとそのようなことが当たり前にできる民族なのだと思います。

アメリカの真似をして法律をいっばいつくっています。彼らは多民族だし、ある程度のルールをマニュアルで決めないといけません。ですが、日本人にはマニュアルなんて本当は必要ないのです。震災のときもそうですが、道路の瓦礫が撤去され、なんとかクルマ

で通行が可能になったときも、幹線道路ではまだ信号がついていなかったのですが、それが譲り合って走り、事故も起きませんでした。

あうんの呼吸とでもいうのでしょうか、ともかく、そういう臨機応変な判断というのが日本人はできるのです。

今回の地震ではそういう日本人のレベルの高さをあらためて知ることができました。今回の再生プロジェクトは、国の援助ではなくて民の力で切り拓いていこうというものです。民力の高い私たち。そんな私たちひとりひとりの力が結集するからこそ、このプロジェクトは成しとげられるものと確信しています。

だから私はこの重責を引き受けたのだし、引き受けたからには何が何でもやり遂げるつもりでいます。失敗の許されない、非情に重いプレッシャーではありません。

ですが、震災の日、亡くなった方々と私をかけたものは、紙一重にも満たない差ではありません。事実、私はもう死を覚悟したし、いまだによく生きていられたものだと不思議でしかたありません。

あのときに一度死んだのだと思えば、今は生きながらえた命に感謝して、「死ぬ気でこのプロジェクトを成功させるのみ」と覚悟しています。

実はプロジェクト立上げ当時の6月上旬、震災のストレスと過労で抵抗力が落ちてしまったのが原因で、1週間、都内の病院に入院しました。お陰様で体調は着実に良くなってきました…。

もちろん、今回このプロジェクトに参加してくれた方々に対しては、この義理や恩恵には絶対に報いたい、倍以上にしてお返ししたいと思っています。

そのエネルギーが私になれば、人にお願いなどできません。お願いするつもりもありません。もともとそこまで自分にはできないと思ったら、「いいから」と、「ムリだから、やめる」と、はなからお断りしています。

しかし、そうではありません。この助かった命でもう何がなんでもやるぞと、この理想にむかって、とにかく私のやれることは一生懸命やっていこうと、今はただただその一心でおります。

どうか皆さん、世界有数の漁場三陸海岸の水産業復活に力を貸してください。助けてください。

そして、1000年に1度の大地震といふこのピンチを、1000年に1度といふ大き

な大きなチャンスに置きかえて、光り輝く新たな日本をともにつくりあげていくこうではありませんか！

平成三十三年九月十一日（日）

木村 隆之

あとがき

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

この小冊子は、パシフィコ横浜 大ホールで行なわれた講演会で使用した資料です。講演録ではありません。

2500人のお客様がいらっしゃったので、緊張するかと心配していましたが、この資料を準備していたお陰で、45分間落着いて話すことができました。

講演後、内容を一部修正し、写真を追加しました。

友達に送りたいと思っただ方は、ご自由にご送付下さい。

もちろん、コピーも転送もOKです。

ともに、新しい日本を作りましょう。



にんげんクラブ泉浩樹提供